



原子力規制庁が昨年10月にまとめた報告書「発電用原子炉施設に対する降下火砕物(編集部註)降下火山灰と同義)の影響評価について」における結論が、今後、社会に与える影響は大きいと、ユニパック(本社・埼玉県川口市)の松江昭彦社長は指摘する。

## 装着すれば天カセが空清に早がわり

「ユニ」に、公共性が高い事業者が注目し始めた。

「南風」は降下火山灰対策要求が全国でも特に高い鹿児島市内の顧客の要望に応える形で開発し、同地域では導入増勢が続くが最近、首都圏の事業者も「南風」を採用するケースが増えてきた。首

都圏で「南風」を採用した事業者は私鉄本社ビル(東京都、緊急用、MCA無線の中継局(山梨県、常用)、大手衛星放送局(東京都、緊急用)等)、採用理由はスバリ富士山噴火への備え。首都圏に事業所を持つものにとつて、降下火山灰を発生させる噴火リスクが最も高い火山は富士山だ。1707年の宝永大噴火では16日間も降灰したとの記録がある。高度な電子機器にとつて降下火山灰は非常に厄介な存在だが、その粒径は数十から数百オクターの

ランネットフィルタもしくは使い捨ての中性能フィルタが標準装備されている。「恵風」はこれらフィルタの代わりに使える洗浄再利用可能な薄型準中性能フィルタ。天カセのフィルタはランネット型の場合、月1回ペースで現地での洗浄を行い、中性能タイプは(汚れの度合いにもよるが)1年1回の交換で集塵機能を保持するのが一般的。それぞれに課題があり、前者は捕集性能が高くないためIAQが低水準となるほか、同様の理由から3年から4年に一度の頻度で熱交換器等の内部洗浄が必要になる。一方、後者はIAQ水準を比較的高くできるが、1年使い捨てであるため運用コストが高んでしまう。

子力規制庁という公的機関が今回、数値を示すことで、今後、一般建築物でのBCPガイドラインに大きな影響を与えることは十分に考えられる。火山の噴火は予測が困難で、被害が大きな自然災害。そうした認識がじわりじわりと首都圏の方々の間で高まり始めており、緊急性・重要度の高い購入コストが不要。清掃費や毎年の購入費などトータルコストを比較すると「恵風」はランネットフィルタに対して約3割、使い捨て中性能に対して約5割の費用削減が可能(4年間比較、定価にて同社が試算)。さらに「恵風」は、フィルタ素材に抗アレルギー処理を施しており、標準フィルタから交換する事で天カセに空気清浄機



ユニパック

松江 昭彦 社長

導人構成比を持つ天カセには、サ能を付加できるのもポイント。

本でも取り組みが急増しているが、首都近傍の活火山が噴火した際の降下火山灰対策は国のガイドライン等でも想定すべきリスクに含まれてはいなかった。これは現場レベルで対策を考える時に「基準」が無いことになる。原子力規制庁が、リスク管理が一際厳重な原発において「安全・安定稼働に影響する要素」として、降下火山灰を挙げたことで今後、ビル等の一般建築物におけるBCP対策でも、この報告書の結論が、物差